

東京家政大学総合研究プロジェクト「報告会」

ひとの生 (Life)を



支える学の構築

健康生活研究の東京家政大学

令和3年2月15日(月) 13:00～16:10(開場12:30～)

東京家政大学 板橋キャンパス120周年記念館 3階 120-3C講義室(WEB講演会)

プログラム

【主催者挨拶】 13:00～13:10

山本 和人 学長(東京家政大学・東京家政大学短期大学部)

特別レクチャー 13:10～14:00 (質疑応答10分)

特許のとれる発明、とれない発明

亀井 恵二郎 様

(株式会社理研鼎業ライセンス部 主任コーディネーター／
高島国際特許事務所弁理士)

中間発表 14:00～14:50 (各10分)

QOL (Quality of Life;生活の質)向上を実現するための、
超高感度で迅速な遺伝子診断装置の開発に関する研究

池田 壽文 教授(家政学部 環境教育学科)

子育て家庭の健康を支援する食事作りの提案

赤石 記子 講師(家政学部 栄養学科)

青年期女子が社会の中で生き生きと活躍できるための
心理支援に向けた基礎研究 ―現代における「女性
に対する不合理な信念」に焦点をあてて―

平野 真理 講師(人文学部 心理カウンセリング学科)

高齢者用衣料品の風合いと快適性

濱田 仁美 准教授(家政学部 服飾美術学科)

Ⅱ期採択研究 15:00～16:00 (各10分)

身体介助に伴う脳活動特性の解明:身体介助システム
の実装を目指して

鈴木 誠 教授(健康科学部 リハビリテーション学科)

地域活性化プログラム(PBL)の開発

尾崎 司 准教授(保育科)

がん教育を通して学校とがん患者家族の「つながる
力」を高めるテキスト開発 ―家族にがん患者がいる
場合の子どもの健康相談を観点として―

五十嵐 友里 講師(人文学部 心理カウンセリング学科)

AR(拡張現実)グラスを用いた運動プログラム
(ARactice)の開発と介入効果の検証

磯 直樹 准教授(健康科学部 リハビリテーション学科)

超高齢社会における「つながり」再生と多様な地域
資源による「これまでどおりの暮らし継続」への挑戦

曾根 博美 准教授(家政学部 造形表現学科)

視覚障害児の触地図の製作に関する研究

清水 順市 教授(健康科学部 リハビリテーション学科)

【まとめ・閉会の挨拶】

峯木 眞知子 教授(研究支援担当 副学長／家政学部 栄養学科)

特別レクチャー



特許のとれる発明、とれない発明

亀井 恵二郎 様

株式会社理研鼎業ライセンス部
主任コーディネーター/
高島国際特許事務所弁理士

「特許をとれる発明」とは何かを考えたとき、一般的には「最先端」とか「技術的に凄い」といったようなイメージが先行しています。このようなイメージは基本的には正しいのですが、単に最先端かつ技術的に凄い知見であっても特許が付与されないケースも多々存在します。一方、小学生が特許権を取得したといったニュースが報道され

ることもあり「最先端」等の特性が必ずしも特許付与の条件ではないことも容易に想像されます。そこで本レクチャーではどのような知見が特許になるのかを概説し、更に、どのような知見の特許化すべきか等についても紹介します。

研究報告－中間発表

QOL（Quality of Life；生活の質）向上を実現するための、超高感度で迅速な遺伝子診断装置の開発に関する研究

生体内分解酵素に耐性を持つ人工核酸をプローブとしたセンサーチップを用い、ラベルフリーな電気化学的検出方法を採用することで、PCR増幅を必要としない超高感度な遺伝子測定技術を開発しました。本年度はセンサーの精度向上と感度向上に関する研究を行い、実用化のための技術基盤の確立を目指しました。



池田 壽文 教授
家政学部
環境教育学科

子育て家庭の健康を支援する食事作りの提案

子育て家庭の多くが育児と仕事に時間が割かれ、食事作りの負担が大きくなっています。本研究ではアンケートにより食事作りに関する課題を明らかにし、エコ・クッキングの手法を利用して、子育て家庭の健康を支援する食事作りについて検討した結果を報告します。



赤石 記子 講師
家政学部
栄養学科



平野 真理 講師
人文学部
心理カウンセリング学科

青年期女子が社会の中で生き生きと活躍できるための心理支援に向けた基礎研究－現代における「女性に対する不合理な信念」に焦点をあてて－

女性が社会で活躍できるための制度が整えられ、旧来的な性別役割が緩和される一方で、若い女性たちが自分の可能性を信じ、自由な将来展望を持てるまでにはまだ課題があると言えます。本日は、現代の若者が抱く新たな「暗黙の女性観」と、それらの精神的健康との関連についての調査結果を報告します。



濱田 仁美 准教授
家政学部
服飾美術学科

高齢者用衣料品の風合いと快適性

本研究は、高齢者の健康な生活を支える快適な衣料品の提案を目的としています。近年、幅広い世代での利用が増加している吸水パッド等の衛生製品の風合いと、フィット性の違いによる衣類のシルエットの差異や心拍変動等の差異について、報告します。

研究報告－Ⅱ期採択研究

身体介助に伴う脳活動特性の解明：身体介助システムの実装を目指して

2020年度の研究で明らかになった身体介助に伴う神経活動の振動同期と神経興奮性の変化について報告します。そして、身体介助システム（特許6598319号）の実装に向けた課題について議論したいと思います。



鈴木 誠 教授
健康科学部
リハビリテーション学科

地域活性化プログラム（PBL）の開発

本PJでは、地域連携プラットフォームを形成し、WSとE-Learningによるプロジェクト学習のプログラムを開発します。今年度は地域や学生が活動自覚となったため、プラットフォームの可能性を検討しました。



尾崎 司 准教授
保育科



五十嵐 友里 講師
人文学部
心理カウンセリング学科

がん教育を通して学校とがん患者家族の「つながり」を高めるテキスト開発－家族にがん患者がいる場合の子どもの健康相談を観点として－

がん教育の実施にあたっては、がん患者の親を持つ子どもなどに対する個別配慮が必要ですが、そのための資料はほとんどありません。そこで、資料作成の一環としてがん教育の担い手である外部講師がどのような個別配慮が求めているのかについて検討しました。



磯 直樹 准教授
健康科学部
リハビリテーション学科

AR（拡張現実）グラスを用いた運動プログラム（ARactice）の開発と介入効果の検証

バーチャルリアリティ技術の進歩により、その成果がリハビリテーションにも応用されつつあります。しかし、仮想現実の環境下では周囲や自身の状況を確認しにくいなどの問題があります。そこで、障害者に利用しやすいプログラムの開発を目指しています。

超高齢社会における「つながり」再生と多様な地域資源による「これまでどおりの暮らし継続」への挑戦

高齢化率の高い新宿区の戸山ハイツにおいて、地域住民のつながりの再生と住民個人の自己効力感を高め「これまでどおりの暮らしの継続」を支援する目的で実践している、「介入」としてのアートの成果事例を紹介いたします。



曾根 博美 准教授
家政学部
造形表現学科

視覚障害児の触地図の製作に関する研究

視覚障害者は触地図の情報から地形を学習しています。この研究では視覚障害者から得られる環境情報を統合し、コンピュータで製作した触地図が視覚障害児の歩行訓練や通学に有効であるかの検証を目的としています。



清水 順市 教授
健康科学部
リハビリテーション学科